東部エリア

国史跡　宮の前廃寺跡

深津高地に囲まれた古代寺院

路後　深津島山　暫
君目不見　苦　有

万葉集の中の柿本人磨呂歌集に入っている和歌です。「しばらくの間も、あなたのお姿を見なければ、私は心苦しいことです」という意味の恋歌です。路後は備後のことです。「路後の深津島山」は、「しましくも」にかかる序詞であって、深津に住んでいる人とか、深津の情景を詠じたものではありません。しかし、瀬戸内の美しい島山に囲まれた港町として、「路後深津島山あり」と奈良の都の人たちにも知れ渡っていたのです。

八幡社参道
国道182号を見下ろす参道の右手に塔跡、左手に金堂跡があります

奈良・平安時代には、福山湾の中心地は深津湾の集落であり、当時は「深津市」、また、福山市合併まではこのあたりを「市村」といいました。神辺平野から、駅家、府中に広がる備後地方の外港であり、物資の集散地であったのです。

江戸時代の『備陽六郡志』には、「住古海蔵寺といふ寺有。当村の生土八幡は海蔵寺の鎮守なりしとそ」、そして、礎石が残っていると記されています。半島状の深津高地に囲まれた、かつての深津湾の奥まった所に、古代の寺院の海蔵寺があり、現在、廃海蔵寺跡（宮の前廃寺跡）の遺跡が残っています。

遺構の発掘調査から、八幡神社に登る参道の右手に塔跡、左手に金堂跡があることが判明しました。中門、東側に塔、西側に金堂、そして講堂のある法起寺式の伽藍配置になっていたのですが、中門や講堂跡はまだ発見されていません。奈良時代の前の白鳳時代（645年～710年）の寺院であったのです。塔跡には、礎石や基壇の築造に使用した塼（レンガ状のもの）が現存しています。また、遺物に「粟麻呂」などの人名の文字を陰刻した文字瓦は、塼とともに全国的に珍しく注目されています。

塔跡
塔基壇は、一辺12.6mの正方形で地山をけずり出し数個の塼を積みめぐらしています

森閑とした八幡神社、その広い境内にある宮の前廃寺跡は、国道１８２号近くの蔵王町五丁目にあります。散策コースに加えてみてはいかがでしょうか。

（１９９３年10月号に掲載）

福山衝上断層

奈良津・蔵王城山露頭

岩体が地表に現れている所を露頭といいます。奈良津の北消防署近くの切取崖には、衝上断層という大変めずらしい断層の露頭があります。ここでは、新しい地層の上に古い地層が乗り上げているのです。

断層とは地盤運動で岩体の中の裂け目を境に両面がずれる現象です。断層には、正断層と逆断層があります。

逆断層は、図1のように、上盤が両側からの圧力によって、もう一方の下盤より高い位置に押し上げられた断層です。このうち、低い角度の断層面に沿って、上盤が大きく押し上げられたものが衝上断層です。

福山衝上断層奈良津露頭
逆転した地層が観察できる、大変珍しいところです

整地中に発見されたこの衝上断層は、調査の結果、木之庄、蔵王城山、坪生でも露頭がみつかり、全長約14kmの大きなものであることが確認されました。

図2の断面FF'の下部は、UU'の右側から礫（れき）岩、泥岩、砂岩など古い順に重なりあっている福山累層という地層です。UU'の左側と断層面のFF'の上部は、古い時代の火山活動によってできた花崗斑岩（かこうはんがん）です。

これは、もともと基盤の花崗斑岩の上に福山累層が堆積していましたが、その後の断層にともなって、上盤の花崗斑岩が低角度で押し上げられたことを示しています。また、断層面に近い福山累層やその直下の花崗斑岩が、時計回りにめくりあげられ、層が逆転していることを示しています。

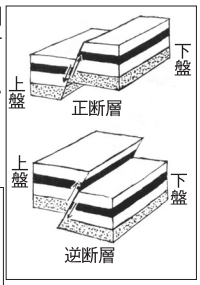


図1　断層模式図
裂け目の傾きに対して上方が上盤、下方が下盤といいます

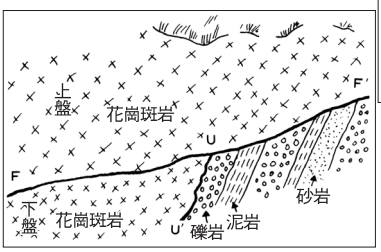
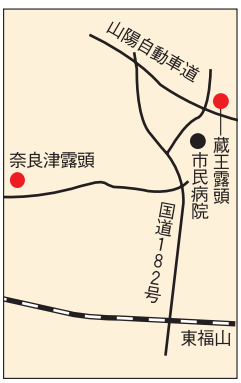


図2　奈良津露頭模式図



断層で切られた福山累層の上層部は、今から約200万年前、ようやく人類の祖先が現れた頃にできたものです。つまり衝上断層は、その頃に生じたものであるといえます。

今日、私たちが見るこの断層は、一度に起きたものでなく、岩体が数十万年の期間をかけて、数㎜の単位でゆるやかに動いた結果です。

奈良津のこの露頭は、道路からよく観察ができる蔵王城山の露頭とともに、広島県天然記念物に指定されています。

（1995年6月号に掲載）

坪生滑池窯跡

須恵器を焼いた登り窯

滑池（なめらいけ）は坪生町の東端にあり、岡山県笠岡市と接する位置にあります。

坪生町は古くから焼き物に適した粘土層があり、須恵器（すえき）などの土器片や瓦片が多く散布していることから、古代には焼き物の生産地であったことが考えられていました。

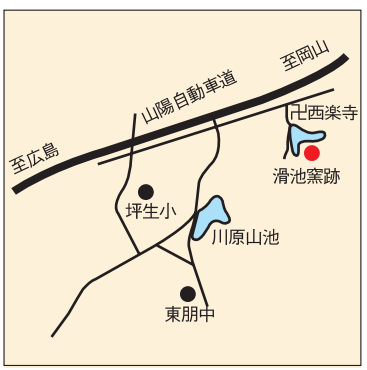
ここ滑池にも、西側の水際に黒い灰とともに、たくさん須恵器片が散布しているため、窯の存在が予想されていましたが、1994年、滑池周辺で開発事業が計画されたため、土器散布地を中心に試掘調査を実施し、遺跡の性格や範囲の確認を行いました。

滑池窯跡
整備された芝生の下に、２基の登り窯があります

その結果、水際から山の斜面にかけて須恵器を焼いた窯を2基検出することができました。試掘調査でとどめているため詳細は分かりませんが、幅2m前後、長さ10m前後の登り窯で、水際の黒い灰と須恵器散布場所は、焼き損じた土器や灰をかき出した灰原（はいばら）と呼ばれる場所と思われます。

採取した須恵器は、坏（つき）、壺（つぼ）、甕（かめ）などの器種が見られ、形態から奈良時代から平安時代にかけて焼かれたと考えられています。須恵器は、5世紀に朝鮮半島から伝わった新しい技法による焼き物で、良質の粘土を使い、登り窯で1，000度以上の高温で焼くため、それまでの弥生土器やその流れをくむ土器と違い、灰色で硬質の焼き物となりました。

採取した一部
試掘調査で採取した、壺や甕など須恵器の一部



須恵器の窯跡は、福山地方では神村町や熊野町が知られていましたが、今回の調査で、坪生町一帯もその生産地であることが確認されたのです。

滑池の近くで採取した瓦と平安京の遺跡から出土した瓦が同じであることも確認されており、このあたりで生産された焼き物は、周辺地だけでなく、遠隔地に運ばれ使用されています。こうした重要性から、窯が存在する場所は開発から除外され、整備した後、福山市の史跡に指定されました。（指定年月日・1997年7月31日）

（1997年8月号に掲載）

千田大迫古墳

往時の繁栄を物語る

神辺平野から山沿いに千田町を経て、古くは「市村」と呼ばれた蔵王町に出ます。この丘陵地域は、早くから人が住みつき、国の史跡「宮の前廃寺跡」をはじめ古代の遺跡が多い所です。

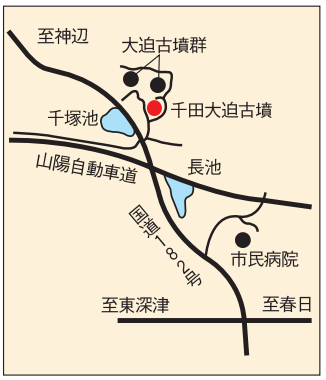
長池の北、天神山裾の緩やかな傾斜地は、かつて多くの古墳があり、千塚古墳群と呼ばれていました。

江戸時代中期に書かれた郷土史書「備陽六郡志」に、古墳は「千田村長池の邊より北の山奥に移し。近き比、今岡村池普請に塚の石を取崩侍れば、磁器の類を持出したる事有」と記されており、早くからその存在が知られ、同時に破壊が進んでいたことが分かります。

千田大迫古墳
小規模ながら、墳丘の構築状況を知ることができます

千田大迫古墳は、千塚古墳群の北山裾にあります。この古墳は1975年に、造成のため山肌を削っていて偶然発見されました。当時は、石室の一部が露出しているだけでしたが、その後の豪雨によって半壊してしまいました。現在では、覆い屋が造られ保存されており、西側に張られた金網ごしに見学できます。石室は南に開口する横穴式で、規模は現状で奥行き3.4m、幅1.5m、高さ1.2mです。須恵器の平瓶や土師器片が出土し、これらの遺物から古墳の築造時期は、6世紀後半から7世紀前半と考えられています。

大迫古墳群の一つ
巨大な天井石で造られた古墳です



また、墳丘断面を見せたまま保存されているので、墳丘の構造が観察できます。地山を掘り込み石室を築いた後、墳丘が崩れないように幾層にもわけて山土を積み、突き固めた様子が分かります。

この古墳のすぐ北にも半壊した横穴式石室があり、さらに北の小尾根を越える畑の斜面に、大きな天井石を乗せた古墳が見つかります。これらは、大迫古墳群と呼ばれています。

これらの古墳群は、宮の前廃寺跡とともに、往時の繁栄を物語っています。

※千田大迫古墳の見学には、民家の軒先や畑を通らず、覆い屋背後の山道を利用してください

（1998年2月号に掲載）

浦上八幡神社本殿
16世紀末の様相を伝える

浦上八幡神社は、なだらかな春日丘陵を見渡す小高い丘の南斜面にあります。

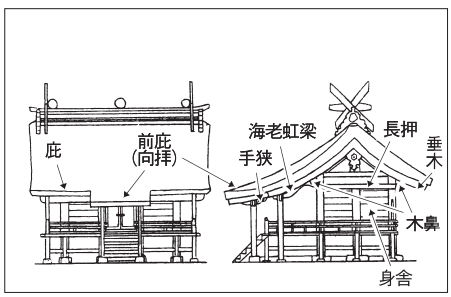
この神社には、社宝として木製の鳩が1体伝えられています。鳩の腹面に書かれた墨書には、もとは近郷の鎮守として坪生村の新中に祭られていたが、1538年（天文7年）に、氏子間に内紛が起こり、旧社殿から木造三尊、鬼、鳩などを持ち帰り、新たにこの神社をおこしたことが記されています。『福山志料』にも同じころ、坪生の神（新）中八幡神社が内紛によって分裂し、社宝が分散したことが記されており、鳩に墨書された神社の歴史を裏付けています。

浦上八幡神社本殿全景

庇下の海老虹梁と木鼻

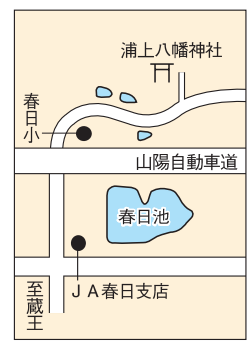
また、神社に伝わる1649年（慶安2年）の『八幡宮御発心御次第』には、1590年（天正18年）に神々をこの場所に移したと記されており、あるいはこの時期に社殿の造営がなされた可能性も考えられます。

社殿は、芸備地方に多い前庇の付いた流造の型式です。身舎は、桁行3間、梁間2間で、1間の前庇（向拝）が付いています。柱は面を大きく取った角柱になっており、組物などには彩色されている部分もあります。



浦上八幡神社本殿略図

庇の柱は現在、縁の先まで張り出していますが、もとは身舎の前面に建てられていたもので、その位置には海老虹梁が取り付けられています。現況のように改造されたのは、18世紀の中ごろと考えられ、この時期に向拝の軸組、垂木、屋根材などの取り換えも行われています。



一方、建物の細部では、木鼻、海老虹梁、組物などの多くは室町時代と思われる材が使われています。装飾のため彫られた手挟も、1575年（天正3年）に建立された県重要文化財指定の枝宮八幡神社（山県郡北広島町）によく似た形です。また、柱の面が大きく、長押も細いこはなど古式な点がいくつか見られており、1590年とは断定できませんが、それに近い16世紀末ごろの様相を伝えています。

（1998年8月号に掲載）

春日池

「く」の字形の土手をもつ大池

福山市にはたくさんの灌漑用溜池がありますが、その中でも江戸時代初期に造られた「瀬戸池・春日池・服部大池」は、福山藩の三大池と呼ばれています。

春日池は、福山駅から北東方向に直線で約6kmの場所にある平地溜池です。干拓により新田開発が進められる中、寛永20年（1643年）頃、灌漑用として築造されました。

春日池

池の北面にあるウテビ

この池は、干拓され水田となった184町歩（春日・南蔵王・引野方面）に多くの水を送り、米などの農業生産に大きく貢献しました。池の大きさは、『福山志料』に、周28丁・布地五萬六千歩（周囲約3，000m余り・面積約18ha）とありますが、今では幾分小さくなっているようです。

『春日池史』によると、築造当初は「浦上池」、その後は「能嶋池」と呼ばれていましたが、元禄12年（1699年）以降は「春日池」という名称に統一されたと記されています。

また『春日村畧史』には、三方を丘陵に囲まれた場所に「ドウドウ池・中池・春日池」の三池があったのを、能島北山の「フシンバ」と呼ばれている辺りの土で土手を造り、一つの大池としたと記されています。その後、正徳3年（1713年）に洪水のため土手が大破、天明3年（1783年）には南樋を改築、2年後には堤防が切れ北樋が破損、天保12年（1841年）には洪水のためウテビ破損というように、破損と修理が繰り返され、明治以降も維持のための工事が数回行われ今日に至っています。

土手の長さは270mで、北側にあるウテビは幅20mあります。放水路の底には数10cmの石が敷き詰められており、今も見ることができます。（2009年度の水路工事で取り除かれ、見ることはできません）また、土手の形が直線でなく、「く」の字になっているのが特徴ですが、堤防改修のためかどうかは不明です。

現在、池の周囲は春日池公園として整備され、市民の憩いの場として利用されています。

※ウテビ…水量が一定量以上になったとき、余分の水を排出する構造物

（2000年4月号に掲載）

井溝
北部の水田を潤す用水路

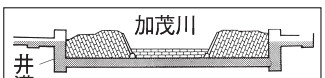
年間降水量の少ない瀬戸内沿岸地域の水田農業にとって、水の確保は大きな課題でした。そのため福山平野では、前月号に掲載した溜池の利用や、芦田川から水を引き込み人工の水路を利用して、水田に水を入れる方法をとっています。今回は、ＪＲ福塩線戸手駅南の福戸橋近くで芦田川から取水され（現在は５００ｍほど下流）、駅家町・御幸町・神辺町道上付近の水田約２００haを潤している用水路『井溝』について紹介します。

井溝最上流の芦田川からの樋門出口

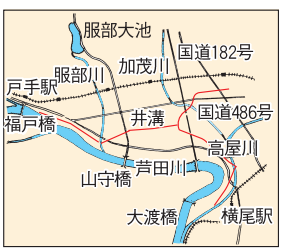
この用水路は、駅家町江良で服部川の下を潜り、下岩成で二手に分かれ、一方は加茂川の下をサイフォンの原理を利用して横切り、神辺町方面に流れています。もう一方は、中津原で高屋川に流れ出て再び芦田川に帰っています。

井溝からの取水については、井手（堰・ドンドン）の高さなど細かなきまりがあり、明治20年（１８８７年）には、上流域と下流域の水争いを解決するために、取水時間に関する取り決めがされました。その内容には、近田・江良・坊寺・上山守・下山守は午後５時から翌日の午前９時、そして下流の森脇・中津原・下岩成・神辺町の各地（十三軒屋・十九軒屋・道上）は、午前９時から午後５時までの間に取水することができ、取水占有時間中に水路を妨害した場合は、直ちに告訴するとの条項もあります。ただし今日では、この取り決めの内容も多少変更されているようです。

中津原井溝終点付近



加茂川サイフォン模式図



この用水路は、井溝土地改良区によって管理され、毎年田植え前の５月には関係者総出で、腰まで水に浸かり、泥まみれになりながら溝さらえが行われています。今日の私たちは、この水路から安定した稲作と水の確保という面で多大な恩恵を受けており、川を汚さない努力をしたいものです。

江戸時代に造られた同じような用水路としては、本庄町で芦田川から取水されていた『上井手』『下井手』、郷分・山手方面への『羽賀用水』、府中市の『五ケ村用水』などがあります。いずれの用水路も、作物の収穫量を増やし、福山藩の財政力を強化するためと考えられています。

（２０００年５月号に掲載）

砂土手の石柱

水との闘いを刻んで

御幸町周辺は、大雨が降るとすぐに浸水してしまうほどの低地帯でした。

江戸時代初期の福山藩水野氏時代に、芦田川に堤防（土手）が築かれていますが、下流の城下や農村を水害から守るためにこの低地が利用されました。江戸時代後期に編纂（さん）された『福山志料』に、「乗越堤（のりこしつつみ）…ワザト切放シテ…」と記されているように、芦田川が大きく屈曲する中津原羽賀の土手の一部は、一段低く築かれ、増水の状況によっては、人為的に切り放し御幸町側にあふれさせ、下流域に流れる水量を減らす調節弁の役割を果たしていました。

「我芦田川沿岸地方民ノ生命線トシテ多年悪戦苦闘ノ古戦場タル羽賀砂堰ノ…」「砂堰高三尺」と刻まれた石柱

水があふれ出ると中津原、森脇、下岩成あたりは一面泥海と化し、家屋や家財道具、農作物は大きな痛手を被り、人々は小舟で避難したり、2階や天井で暮らす状況となりました。

低い土手を高く強固にしたい御幸町側と、そうなると逆に浸水にあってしまう下流域とで、土手を築くことについてしばしば対立が起こりました。そこで、その妥協策として1905年（明治38年）に石柱（幅24cm、長さ3.2m）を低い土手の中央に埋めたのです。上部3尺（0.9m）のみを地上に出し、石柱の高さまでは砂で土手が築けるというもので、砂土手が切れるか切れないかは、この地域と下流域の農民にとって1年間の生活を左右する重大なものでした。

芦田川左岸の芝生に設置された標石

芦田川大改修により、1933年（昭和8年）に森脇八幡神社境内に移建されたこの石柱は、砂土手が切れるたびに修復を繰り返し、水と闘い続けた農民の苦難を今に伝えています。

（2001年5月号に掲載）

仁井山城跡

南北朝ごろの要衝

仁井山（にいやま）城跡は、坪生町の北東に位置する標高115mの丘陵上にあります。坪生町一帯は、平安時代末期には坪生荘と呼ばれる京都貴族領としての荘園となっており、室町時代まで存続していました。

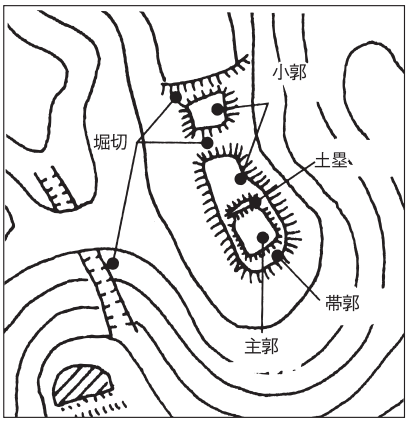
南北朝のころ、坪生荘に隣接する竹田高富荘（たかとみ）（神辺町）を本拠とする北朝方の鼓氏が、ここ仁井の合戦で南朝方の坪生荘勢力を破り、仁井地区を支配下におさめたと伝えますが、この時の城主は神原氏あるいは坪生氏、仁井氏など記録によってまちまちです。

中央の丘陵が仁井山城跡（南の丘陵から）

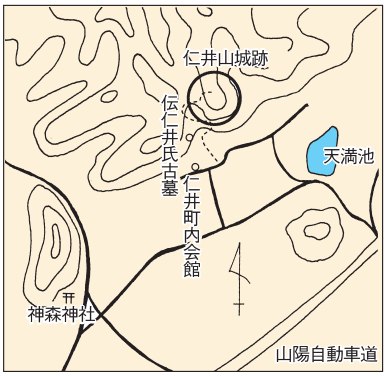
城は、南北に長い尾根上に築かれ、周囲は急峻な斜面になっています。その西側斜面の小道を登りつめると城跡にたどり着きます。

尾根先端の最高所には、高さ1mの土塁を北側に持つ約20m四方の主郭が置かれ、これを小郭と帯郭（おびくるわ）が取り囲んでいます。また、北側と西側の尾根続きには堀切が設けられ、外部からの侵入を防いでいます。

この城跡からは、坪生盆地はもとより、遠く福山市街地まで一望できるうえに、北は神辺、南は笠岡方面に通じる街道を眼下におさめ、敵の動きを監視できるまさに要衝の地といえます。



仁井山城跡略図



なお、城跡の西向かいの山すそには五輪塔がずらりと並び、「仁井氏古墓（こぼ）」と伝えられています。

（2002年4月号に掲載）

深津島山①

かつては海に突き出た半島

蔵王山から南へ延びる深津高地は、近世に干拓が進むまでは海に突き出た半島で、万葉集には「深津島山」と詠われています。蔵王テレビ塔下には、

路の後深津島山しましくも君が目見ねば苦しかりけり（2423）

の万葉歌碑が建ち、その背後から深津島山はもちろん、瀬戸内の島々や遠く四国の連山を望むことができます。

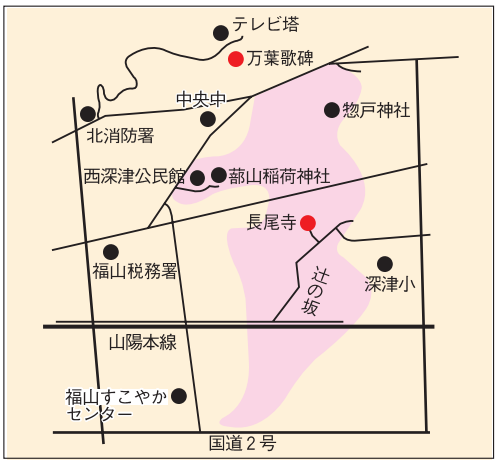
笠岡街道は、寺町筋から三枚橋を渡ってこの丘陵にぶつかり、辻の坂を越えて東に延びていました。丘陵上には、由緒ある寺社や記念碑、道標などの石造物が点在し、歴史散歩の1日コースとして最適です。

万葉歌碑

丘陵の東の付け根に、綱木という地名が残り、丘の上に室町幕府最後の将軍足利義昭を祭ったと伝える惣戸神社があります。また、中国中央病院（現在は御幸町）の西、蔀山稲荷神社の境内は、義昭の居館跡と伝えられ、市の史跡に指定されています。

蔀山から南東方向、福山暁の星学院の東に長尾寺があります。長い石段を上り山門をくぐると、天長龍の庭を配して正面に本堂があり、境内はよく整備されています。慶長のころ（1596～1615年）、福島正則の家臣長尾勇人が、夢に現れた童子のお告げにより再建し祈願寺としたため、以後長尾寺と称したといいます。

長尾寺



（2002年8月号に掲載）

深津島山②

由緒ある古社寺が点在

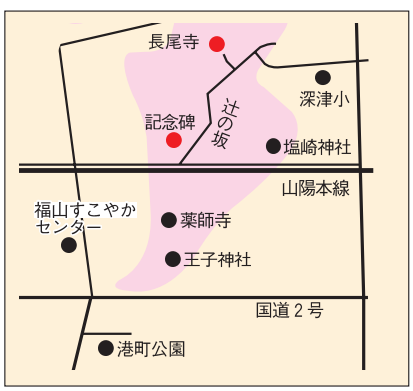
辻の坂は、かつては人馬も難渋する急な坂道でしたが、村田虎吉の尽力で大正の初めに削り下げ、往来が楽になりました。坂の頂上には、その功績をたたえた記念碑が建っています。

辻の坂の東方に位置する塩崎神社は、昔は海辺に鎮座する古社で、住吉三神を祭っています。江戸初期、初代藩主水野勝成がこの沖を干拓しようとしますが、何度土手を築いても崩れてしまいます。当村の庄屋の進言で、勝成が塩崎大明神を祈願すると、土手が切れることなく干拓が進んだといわれています。この土手が、現在も地名として残る「千間土手」です。

辻の坂

塩崎神社から水路沿いに南へ進むと王子神社です。元は岩盤の上に神体の石を置いただけの小社でした。元禄検地のとき、竿役人の竿先を2匹の狐が立ち回るため除地になり、その後大社になったといいます。この神社の境内が深津島山の突端で、福山の市街地が一望できます。島山から延びる岩礁は、港町公園辺りまで達し、度々船が座礁しました。その名残が、公園内の「蛙岩」と呼ばれている岩です。

蛙岩



石段を下り少し北へ行くと、薬師寺の山門で、この辺り一帯は干拓前には西浜と呼ばれる遠干潟でした。文禄（1592～1596年）のころ、海中に光るものを見た西入という法師は、小船を漕ぎ寄せ、薬師の尊像を取り上げます。拝むと霊験あらたかで、草庵を造って安置していましたが、江戸初期に水野家が寺を建立したと伝えられています。

深津高地の古道や由緒ある社寺は、歴史の重みを感じさせてくれます。

（2002年9月号に掲載）

片山病撲滅の碑

藤浪鑑・吉田龍蔵先生の功績

御幸町新茶屋バス停のすぐ近くに二つの石碑があります。「藤浪先生功徳碑」と「吉田先生頌徳碑」です。

江戸時代より深安郡（現神辺・御幸町の一部）内には、日本住血吸虫による風土病が蔓延していました。

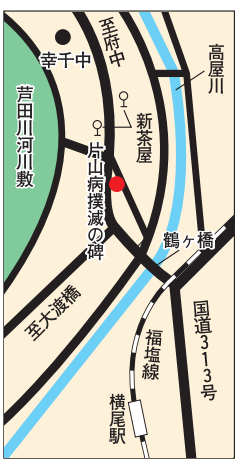
幕末ごろ、沼隈郡山手村の漢方医である藤井好直は、この風土病が片山地方を中心に発生していたことを『片山記』に書き、この病気の解明のため近隣の医者に協力を呼び掛けています。

藤浪先生功徳碑（左）吉田先生頌徳碑（右）

明治になって、粟根村（現加茂町）の医師窪田次郎はこの病気を「片山病」と名付け、治療法の究明に献身しました。また広島県は「片山病調査委員会」を設置しました。こうした取り組みの中、1901（明治34）年、深安郡中津原村（現御幸町）の医師である吉田龍蔵は、患者の健康状態が著しく悪いため解剖研究の必要性を痛感します。3年後の5月に京都大学の藤浪鑑教授の協力を得て行った解剖の結果、肝臓内から雌虫を発見します。これが人体から検出された最初の日本住血吸虫となりました。

吉田龍蔵

藤浪鑑



その後、吉田・藤浪両先生を中心に「地方病研究会」が組織され感染経路や撲滅方法の研究が続けられました。1913（大正2）年、宮入慶之助らが佐賀県の水田から日本住血吸虫の幼虫の中間宿主である巻貝を発見し、「宮入貝」と命名します。片山地方にもこの貝が無数に生息していることが分かり、1918（大正7）年に広島県地方病撲滅組合が組織され、宮入貝の駆除事業が開始されました。

戦後以降の石灰窒素の散布や用水路の三面コンクリート化などの予防・撲滅対策により、広島県では1980年にやっと絶滅が確認され、片山病は終息しました。

二つの石碑は、こうした二人の功績をたたえ建てられたものです。

（2009年9月号に掲載）